

地域支え合い情報

2019年8月20日発行
本体300円+税

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



生出小学校赤石分校で開いた子ども食堂で、流しそうめんを楽しむ参加者（宮城県仙台市太白区／詳しくは2ページ）

特集

みんなで食べると楽しいね

ワクワクがいっぱい！地域を元気にする食堂²
赤石分校青空レストランおいで（宮城県仙台市太白区）

食べる×かかわる×学び合う
若者たちの居場所づくりから⁵
ざわざわキッチン（宮城県仙台市宮城野区）

専門家に聞く地域づくりのヒント⁷
佛光大学 福祉教育開発センター 講師 金田喜弘さん

まじわる災害公営住宅⁴⁷ 8
東町東興会（宮城県大崎市）

東北の元気⁷⁶ 9
片平地区まちづくり会（宮城県仙台市青葉区）

場の力⁴² 10
結の里（宮城県南三陸町）

東北の元気⁷⁷ 11
公益社団法人共生地域創造財団大槌事務所（岩手県大槌町）

どこでもサロン²⁴ 12
つながりづくりの協議体（山形県朝日町）

広域避難者を支えるために¹³
ひろしま避難者の会「アスチカ」（広島県広島市）

読み切り連載リレー◎復興期のコミュニティづくりのヒント² 14
岩手大学三陸復興・地域創生推進機構 特任助教 船戸義和さん

支援員インタビュー³ 15
新井玲子さん（宮城県塩竈市）

宮城県サポートセンター支援事務所の活動日記³ 16
・次号予告

みんなであげると楽しいね

今回の特集では、子ども食堂を取りあげます。子ども食堂は子どもが一人でも来られて無料や低額で食事ができる場所です。子ども以外に若者や大人も参加してふれあえる場所としても全国的に広がりを見せています。「みんなであげると楽しいね!」。そんな声が聞こえてきます。今回は、地域活性化のために地域にあるものを活かして活動する子ども食堂と、若者参画の居場所づくりから生まれた多世代の居場所としての「子ども食堂」をご紹介します。活動の経緯や魅力、工夫とともに、そこから広がり・深まる支え合いの姿をお伝えします。

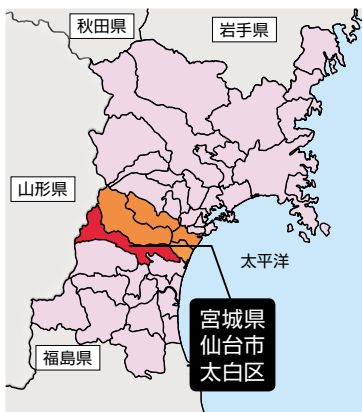


青空の下、生田小学校赤石分校の中庭で実施した流しそうめん。学区内外から親子連れが集まり、東北工業大学の学生も参加した

ワクワクがいっぱい! 地域を元気にする食堂

赤石分校青空レストランおいで(宮城県仙台市太白区)

仙台市南西部、緑豊かな山々とのどかな田園風景が広がる生田学区で、住民による子ども食堂「赤石分校青空レストランおいで」が開かれている。生田学区社会福祉協会の福祉委員と町内の婦人部長、ボランティア計25人が運営。学区内の公共施設を回って、月1〜2回開催する。参加費は無料。スタッフとあわせ、子



どもから大人まで30〜60人が学区内外から集まる。

きっかけは子育て支援

代表の沼田恵子美子さんにこれまでの経緯を伺った。

少子化の進む小出学区には保育所や幼稚園、児童館がなく、住民たちで子育て支援ができないかという思いがあった。何をどうやればいいのか。悩みもあったが、太白区家庭健康課の職員を招いて乳幼児との接し方を教わり、仙台市子育てふれあいプラザを見学して支援の実際を勉強した。「つまるところ、



楽しいことをみんなでやることだと思つた。自分たちのやりやすいものをやるう」（沼田さん）との気づきを得て、2010年に子育て支援のための「めんこいサロン」を始める。17年には、サロンを母体に子ども食堂「赤石分校青空レストランおいで」を開設。休校中の生出小学校赤石分校の活用と地域活性化がねらいで、学区内外の全住民を対象とした。

「支え合いを大事にいろいろな団体と連携しています」と沼田さん。現在の活動費は、生出連合町内会の子育て支援の助成と市の子ども食堂の助成を活用。連合町内会の下部組織「生出地区まちづくり委員会」は、催しの設営を手伝うほか、委員会の農業体験活動「農業塾」^{※1}で育てた野菜を子

ども食堂の食材に提供。地元農家は、定価の半額で米を販売。生出市民センターは、会場提供や、申込窓口の担当のほか、講座を共催することももある。地元の中学生^{※2}は、児童の世話などで運営を手伝う。

「地域はつながっている」

6月22日（土）の開



生出の美しい自然と音楽を楽しんだコンサート

催日は、雨天とあつて参加者が少なく、予定したおはじきのゲームは中止に。昼食は、山菜と油揚げのうどんに、季節の果物を添えたフルーチェ。お手伝い兼参加者の中学1年生の庄司雪乃さんは、「おいしかった」と笑顔で話した。ボラン



きつねうどんに、差し入れの山菜も入れて

ティアの加藤まち子さんに、子どもと接する時の思いを尋ねると、「『学校どう？楽しい？』『また来てね』と声をかけています。その子にあわせた接し方を心がけています」と答えてくれた。ここに携わってよかったことは、「地域の人を知ることができ、自分の顔を覚えてもらえる。子どもにも外で会って、話しかけてもらえるようになったこと」だといふ。体育振興会にも所属する加藤さんは、

ここに来た子を振興会の活動に誘ってそちらに来てもらえることもあるそうだ。「（地域の活動は）皆つながっている」と話す。この日は、参加者が帰ったあとで、スタッフ会議があつた。議題は、次々回の7月27日の内容。流しそうめんなどの企画を固め、準備物を洗い出す。「食べものを流すから、新しいホースを買ったほうがいい」「長さは5mから10mくらい？」「足りないより余ったほう

※1 学区内外の参加者が野菜の種まきから収穫、販売まで行う。モットーは皆で短時間で楽しくやる農業。

※2 全戸配付したチラシや地元のクラブ、PTA会長を通じて中学生の協力をあおんでいる。



7月4日の活動風景

みんなの子ども食堂

がいい。雨で場所が変わる場合もある」とサイズや数量を決め、各担当に準備を割り振っていた。

7月4日（木）は、七夕飾りをつくり、軽食のきなこ団子を味わった。2歳の女の子と乳児の男の子を連れて高橋千春さんは、気分転換に久しぶりに参加したという。「お姉ちゃんになったね」などと迎えてくれたスタッフと談笑。子育ての心配ごとを話し、「うちもそうだったから大丈夫」といった助言をもらっていた。「家族みたいな感じで、落ち着く。うちのことを知っていてくれるので、過ぎしやすい」と高橋さんはこのよさを語る。軽食を準備するスタッフ2人と代表の沼田さんに、どんな思い

で子どもに食事を提供しているか聞いた。

沼田さんによれば、季節の行事や旬の食材を取り入れて、年間の献立を決めているそうだ。昔から続いていたことを子どもに伝えたこと、臼でもちをついたり、ミズキの木に団子を差したりといった機会も設けているという。「買い出しの時は子どもが食べられる食材を考えている」「年間の献立を各担当がアレンジしている。主婦だからそういうのは得意」とスタッフ。「子ども以上に自分たちががんばっている」「集まってワイワイ騒ぐのが楽しい」という声も。

7月27日（土）は、天候にも恵まれ、赤石分校の中庭で流しそうめんを開催。学区外から小学生の子どもを連れて参加した庄司智史さんは、「自然もすばらしく、とても楽しい。

子どももすごくはしゃいでいた」と話した。前後の時間には、赤石分校内で生出市民センターの講座と東北工業大学のワークショップも実施。市民センター館長の樋口洋さんは、「こうしてコラボすることで興味をもってもらえる」とし、赤石分校青空レストランおいでについて「地域の活性化にいい。子どもが集える貴重な場づくりをされている」と語った。

このように、子どもにとってここは、多世代とふれあえる場であり、地区の伝統にもふれられる場だ。親は、育児の気分転換ができ、地域の子育ての先輩から情報をもらえる。地域ぐるみで見守ってもらえる安心感もあるだろう。スタッフも、楽しみややりがいを感じ、地域内外の交流も生まれている。田

ポイント

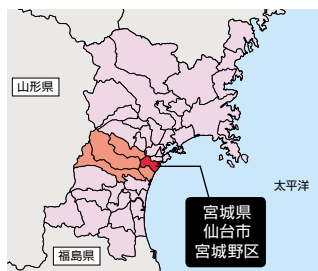
- 赤石分校青空レストランおいでは、地域の支え合いで成り立ち、地域の関係づくりにも役立っている。
- 運営の仕方で悩む場合は、専門職に話を聞いたり、ほかの活動の現場を訪ねてみる。
- 参加者もスタッフも、仲間と楽しむことが一つのポイント。スタッフは各々の得意分野を広げて活躍。

DATA 赤石分校青空レストラン

- ◎日時：月に1～2回 主に午前10時～11時30分
- ◎場所：生出市民センター、坪沼コミュニティセンター、生出小学校赤石分校
- ◎お申し込み先：生出市民センター（TEL：022-281-2040）



コミュニティハウス「がらくら遊覧船サンマリー号」で食事の支度をする調理サポーターとそれを手伝う子ども。すぐ脇のテーブルで子どもたちが宿題を解いたり、おしゃべりをしている



食べる×かかわる×学び合う 若者たちの居場所づくりから

ざわざわキッチン（宮城県仙台市宮城野区）

ざわざわプロジェクトが運営する「ざわざわキッチン」は、地域の子どもから若者、大人まで誰もが集える居場所兼子ども食堂だ。市街地の交流施設で、毎週1回午後1時から午後8時頃までオープン。参加者は一日平均40人。食事代は子どもから22歳までの若者が100円、大人500円。

ざわざわプロジェクトは、趣旨に沿ってプロジェクトの方向性の舵取りをする企画チーム5人とざわざわキッチンの管理運営をする現場チーム3人で構成。食事提供は現場チームのほか、20歳代～80歳代の幅広い世代の調理サポーター9人が体調や仕事、子育てなどの事情を抱えながらフレックス制で担っている。応援・協力は、「ざわざわ応援団」が食材寄付から若者の進路相談等まで広く対応。応援団以外でも、子ども放課後クラブや町内会、小学校、社会福祉法人、協力諸団

体・企業等々、協力や連携の輪は広がっている。

若者の参画による 居場所づくり

ざわざわキッチンは2016年8月に開設した。代表の半澤由子さんは集まった若者たちに、「多世代の居場所をつくりたい」と相談。彼らとどんな居場所になればいいか話し合っただけでアイデアを出し合った。そして、実際に看板や幼児向け遊具をつくり、ウエルカムイベントの企画を練るなどして、多世代を迎え入れる準備を進めた。

同年11月から多世代が参加する居場所になった直後は、「子どもがうるさい」など、多世代ならではの問題もおきようになったが、ここでも若者たちを中心に解決策を考え、何度か実行してみる機会を設けた。また、若者も子どもも気軽に誰かのために役立つ体験ができるよう、希望すれば（内容や状況にもよるが）、

調理補助やセッティング、皿洗いなどの手伝いができるように大人側の体制を工夫するなど、若者が主体的に居場所づくりに参画できるような仕組みをつくっている。

若者たちに大人ができることは何か

ざわざわプロジェクトの企画チームは、以前に中高生の居場所づくりを仕事としていた半澤さんの問題意識をもとに、「若者の生きづらさに大人ができることは、居場所づくりではないか」と話し合ってきた。

14年に、「居場所は本当に必要か」「どんな居



内科小児科の敷地内の「がらくら遊覧船サンマリー号」で場を開く。ざわざわ応援団の情報でつながり、快く貸してもらうことができた



当日までの応援団や参加者からの寄付食材をもとに献立を考える。グループLINEも使い、情報共有とアイデア出しをする

場所が必要か」を確かめる目的で、16歳から80歳の男女1000人にインタビューを実施。その回答をカテゴリーに分けて見える化したものをもとに、複数回の対話の会やワークショップを開いて、つながる・自立・学び合う・安心・地域の拠点・多世代とのかかわり、という「必要とされる居場所の要素」を導き出している。インタビューや話し合いの過程で携わった人たちのなかから、「応援するからが

んばって」とざわざわ応援団が結成され、活動にも協力してくれている。また、1000人インタビューでは、(SOSを出せない)孤独と孤立(問題を抱えていなくても)自己肯定感が低い・自立が不安・人間関係の悩みがある、など若者が抱えている生きづらさが改めて見えたほか、食から見える家庭の現状がわかった。

これらをふまえ、「食べる」「かかわる」「学び合う」3つの役割をもった居場所として始めたのが、ざわざわキッチンだ。

かかわりを通じて子どもも若者も大人も元気に

ざわざわキッチンを訪れると、とてもにぎやかな雰囲気。参加者は教え合っただけの宿題をしたり、キャッチボールしたり、大人と話したり、自由に過ごしていた。ここの印象を聞くと、「大人が話しやすい」(小学5年生)、「楽しくみんなで話

して食べるところ」(中学1年生)、「第2の家」(高校1年生)と話してくれた。ここでのかわりでは、「自分を認めてもらっていると感じた。頼りにされ、自分でも役に立っていると思えた」と話す高校3年生は、3年前に出張開催した1日ざわざわキッチンの準備の主担当を務めた。その成功体験を経て進路に向き合い、歩みを進めている。ここで幼児の面倒を見るうちに保育士を志した若者もいる。興味ある職業のなり方がわからないという若者は、ざわざわ応援団で関連した職種の人とつながり、相談することができた。



子どもも皿洗いなどを手伝う。ただし指示・強制はしない。「主体性に任せる」が行動指針の1つだから

DATA

ざわざわキッチン

時間：毎週火曜日午後1時～8時
 場所：がらくら遊覧船サンマリー号
 (コミュニティハウス)
 宮城県仙台市宮城野区幸町2丁目
 20-20
 HP: <http://zawazawa5.mimoza.jp/zawa5/>

ここで気づきや変化があったのは、子どもや若者だけではない。調理サポーターの80歳代女性は、身体に不自由があり以前は杖をついていたが、ここで活動して「子どもと話して元気をもらい」(本人談)、杖なしで歩けるようになった。参加者とは外でも挨拶を交わす関係にあり、就職した近所の若者には毎朝声をかけ、気にかけている。この8月で、ざわざわキッチンは3周年を迎える。ざわざわキッチンの参加人数が増え、話し合いや若者のニーズに対応しきれなくなっていることもあり、ざわざわプロジェクトでは活動面の見直しも進めている。

ポイント

- 食事ができること、主体性を尊重すること、各人ができることを少しずつ持ち寄ること、多世代の学び合いで居場所ができています。
- 子ども・若者に平等に参画の機会がある。誰かの役に立てると自信になり、うれしい！が倍増。ここで顔見知りとの関係ができていれば、地域で困った時にも助け合いができる。出会いや情報で、やりたいことは見つかる。

専門家に聞く地域づくりのヒント

地域で展開される居場所の姿とは

全国各地で子どもの居場所づくり、特に「子ども食堂」の実践が広がっています。2012年頃から広がり、現在では貧困家庭だけではなく、地域に住んでいる子どもたちや、それを超えて多様な人々が集う場として展開されています。子ども食堂をはじめ、地域のなかにある居場所の「場」にはどんな意味や意義があるのでしょうか。

誰もが集うことができる「場」

赤石分校青空レストランにおいては、就学時の子どもに限らず赤ちゃんから高齢者まで集う地域食堂として展開されています。また、ざわざわキッチンも、みんなの居場所として活動しています。地域は特定の世代の人々だけが暮らしているわけではありません。これまで高齢者サロンや子育てサロンなど、対象別の居場所が中心でしたが、これからはそれに加えて誰でも集える場を生み出すことも重要といえます。

本音が語り合える「場」

ざわざわキッチンでは、若者の想いに耳を傾けて活動を進めています。食事や交流をする場だけではなく、若者が地域の大人たちとも自由に互いに語り合うことができ、そこが若者を受け止める場になっています。この活動がまさに本音を

佛光大学 福祉教育開発センター
講師

金田 喜弘

(かねだ・よしひろ)さん



大阪に生まれ、大阪で育てられた根っからの関西人。桃山学院大学卒業後、佛光大学・桃山学院大学大学院に進学。社会福祉協議会や地域のボランティアグループへの支援を行うかたわら、障害を持つ方とのキャンプなどにも参加し、幅広い地域福祉実践にかかわっている。現在は、佛光大学福祉教育開発センターの講師として活躍中。主な著書として『「対話と学び合い」の地域福祉のすすめ』(共著・CLC)、『福祉ガバナンスとソーシャルワーク』(共著・ミネルヴァ書房)がある。

語る事ができる安心の場として機能しているといえます。

住民自治が醸成される「場」

赤石分校青空レストランにおいては、地域活性化も意識しながら、さまざまな団体と協働し取り組まれています。地域が持っている「人・モノ・カネ・情報」などの強みを活かすことで、地域に根ざした持続可能な実践として展開されています。子どもたちへの食の提供の裏には、地域住民がさまざまな立場で発揮できることを見つけて行動し、オール生出で取り組む醍醐味を経験しています。それは自分たちのまちを自ら創っていく、つまり住民自治の力を高めている実践ともいえるでしょう。

最近、国では我が事・丸ごと地域共生社会の実現を謳っています。地域共生の実現には、トップダウンではなく、身近な地域の課題を地域住民らが対話を進め、それを乗り越えるための取り組みを行い、そこでの新たな気づきと学びをとおして次の展開を考える、この循環のプロセスが重要となります。今回の2つの実践をはじめ、全国にあるこのような取り組みが社会全体を変革していく、真の共生社会を実現する力を秘めているのでしょう。



まじわる!

集団移転 & 災害公営住宅

第47回

体操やお茶のみ、料理、陶芸などで、災害公営住宅と近辺の住民が交流

東町東興会（宮城県大崎市）



地域から先生を招いて月一回開く料理教室。覚えたレシピを家でつくるという参加者も

入口の花壇に植えられた色とりどりの花が、通りがかる人たちの目を楽しませている、古川駅前大通り災害公営住宅（大崎市）。

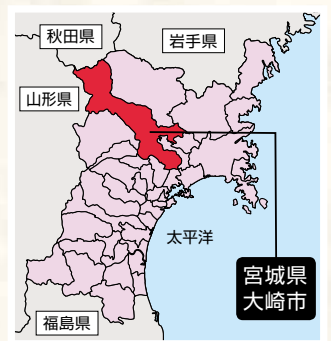
同住宅の集会所で、週一回、住民が集まって体操を行っている。町内会「東町東興会」が主催し、住宅内外の住民約10人が参加。約1時間かけ、口腔体操やいきいき百歳体操に取り組み。数か月おきにインストラクターを招いて健康測定を実施していて、骨密度

や筋力が高まるなど効果が出ている。

運動後のお茶のみも大きな楽しみだ。持ち寄った料理をつまみながら、笑顔と会話が絶えない。

月に各一回は、体操とあわせて、陶芸と料理教室も開催している。そのほか、季節ごとにバーベキューやクリスマス会、豆まきなどの催しを開く。不定期でパークゴルフや旅行に出かけることもある。今年6月には、日帰りのバス旅行で仙台市内を訪れた。ガーデン・ガーデン愛子本店で草花を觀賞し、国指定名勝の秋保大滝の眺望を味わい、物産店アグリエの森で買い物を楽しんだ。

参加者で、半年前から同住宅に住む熊谷まさあさんは、「皆さんのお力をもらいながら、こういう行事に参加すれば、早く仲



インストラクターのDVDを見ながら、いきいき百歳体操に取り組み参加者

よくなれると思って活動しています。この住宅を選んだよかった」と話す。大崎市内の住宅が損壊して、入居した佐々木禮子さんは、「誘われて、ここに来るようになって、楽しくてね」と笑顔を見せる。

住宅は、2014年11月に入居が始まり、6階建て1棟に35戸が生活する。入居者は、既存の町内会である東町東興会に加盟。週一回の体操とお茶のみは、17年12月から大崎市高齢介護課の呼びかけで始まり、住民たちで開催してきた。活動は回覧板で周知し、口コミでも広がっている。

「少しずつ、お互いの顔が見える関係になってきた」と代表の青田清子さんはよろこぶ。長年この地域で民生・児童委員として活躍してきた清子さん



古川駅前大通り災害公営住宅と集会所

は、この場であがった情報を見守り訪問にもつなげるとともに、訪問先でサロンのお誘いをしている。夫で行政区長の精守さんも、運営に携わるなかで、住民の生の声に耳を傾けている。「改まって聞くよりも、雑談形式だと本音が話しやすいと思います」。

参加者の高橋多恵子さんが言うように、こうした集まりには次のようなよさもある。

「ほかの参加者から手芸を教わったり、ひとりで考えつかないことも学べる。皆で食べる食事は、とてもおいしい。何を着ていこうか考えて脳の活性化にもなるし、集会所まで歩くのは健康的。不審な電話がかかってくる時、相談できる人がいるし、先日地震があったときも、声をかけてもらえて安心できた」

田

片平地区まちづくり会

地区社会福祉協議会や連合町内会など地域の6組織で構成。「片平地区平成風土記」の編纂がきっかけとなり、準備会を経て2010年8月に設立。現在は、地域防災体制の強化と地元小中学生の活動の育成に重点をおく。本紙11号に関連記事。

76回目

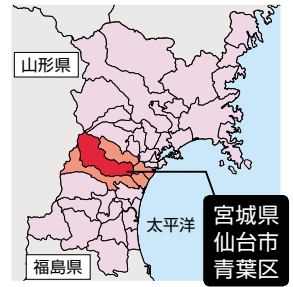
市民リレー

東北の元気

今回は... 東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

若者や外国人住民も参画しての
防災まちづくり

◎片平地区まちづくり会（宮城県仙台市青葉区）



災害に強いまちづくり委員会で作った「片平地区防災行動マップ」。外国人住民には英語版を配付した

「まちづくりをするには、その地域をわからなければいけない。わかったうえで好きになることだ」と片平地区まちづくり会の今野均会長

仙台国際観光協会の情報紙に掲載された片平地区の防災訓練の様子。留学生が炊き出しを行っている

仙台市の都心部に近い片平地区には、東北大学などがあり、留学生を中心に外国人も多く暮らす（約20人に1人）。「片平地区まちづくり会」は、東日本大震災の経験から、若者や外国人住民も参画した防災まちづくりを行う。

震災前は町内会役員が防災訓練を計画・実行していたため、発災後の避難所でも若くて力のある学生が自発的に動けなかったという。避難所に多くの外国人住民が集まり、言葉や文化の違いから摩擦も生じた。その反省に立ち、震災の翌年からは、若者や外国人住民の代表者も防災訓練の企画段階から参画できるようにになった。

片平地区まちづくり会主催の防災訓練に、外国人住民は炊き出しをする側としても参加。マレーシアの留学生は「ハラルフード」（宗教上許された食材を使った料理）のスープをふるまい、その風習を地域住民に説明した。

在日6年のマレーシア人で東北大学留学生のシテイ・マストウラさんは、訓練に参加して次のような気づきがあった。「地震があった時にとるべき行動が学べたし、訓練の必要性がわかった。災害の備えには、近所と顔がわかる関係

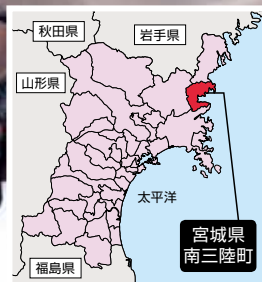
をつくらなきゃいけない」。彼女の夫で同大留学生のアリフ・イサンさんも、「訓練は、地域の人と話せて、文化交流もできる機会。直接日本人から日本のやり方を聞けるので助かる。（外国人住民の）コミュニティの何割かでも参加して、ほかの人にも普及していければ」と語る。外国人住民と地域のつなぎ役になる仙台国際観光協会の堀野正浩さんは、「災害時に混乱しないように、彼らみたいな（在日歴が長く、日本語がわかる）人が（自国の在住者の）リーダーになってくれるといい」と期待する。

同会では、20〜30歳代の地域の若者も防災訓練をはじめとする活動に参画する。同会の一部会で防災活動の要を担う「災害に強いまちづくり委員会」では、若手中心のプレ会議で素案をつくり、最終的に中核メンバーの委員会で審議・決定。プレ会議は自由な発言ができるよさがあり、参画希望する若者もいる。会の実働はプロジェクト単位で行うため、防災や運動会だけでなく自分の得意・関心を選んで、若者も入りやすい。

持続可能な防災まちづくりには、外国人住民や次世代の人の力も必要になる。

南三陸町民のつながりをさらに深めたいという思いから、「結の里」と名づけられた、地域支え合いの拠点。福祉の総合相談窓口や、デイサービスセンター、カフェなどが併設され、さまざまな人が集う。交流はその場にとどまらず、まち全体を一層明るく、温かくしていきます。

住民ボランティアと一緒に運営するカフェなどで、楽しく、気楽に集えます



結の里での活動として発案された「みんな食堂」は、隣接する災害公営住宅集会所で試行的にスタートし、住民同士が食を通じてまじわる機会に

DATA

結の里

〒986-0728 宮城県南三陸町
志津川天王山 38-152
TEL 0226-29-6452
平日 午前8:30～午後5:00に
「えんがわカフェ」、
毎月第3日曜日に
「にちようカフェ」がオープン



結の里をきっかけに、施設内外で住民主体のイベントが開催される



住民検討会にて、住民が希望する交流活動などについて意見交換



災害公営住宅の隣で、福祉の複合的な機能を備え、支え合いを推進

2018年4月に、宮城県南三陸町志津川地区にある災害公営住宅集会所に隣接するように開設された「結の里」。施設管理を担う南三陸町社会福祉協議会が、運営協議会などをおして住民と意見を交換し、一緒に住民同士の交流を育むイベントの開催などを行っている。

建設期間中に、施設の活用方法に関して住民検討会を開き、そこであがった案をもとに始められた取り組みの1つが、「みんな食堂」だ。月1回、50人ほどの住民が集まり、グループごとに分かれて調理と食事をもとにする。住民で同食堂実行委員長の大山たつ子さんは、「誰も寂しい思いをしない地域をつくるきっかけに、自分たちの活動がなれば」と語る。共食の楽しさも味わえるほか、会場に来られない人には宅配をするようになるなど、活動に広がりが見られる。

「つながりたい」「支え合いたい」という住民の思いが、結の里の催しなどを通じて、地域づくりをあと押しする。同社協地域福祉係長の高橋吏佳さんは、「参加した住民の皆さんが、あとから『また来たいな』と思えるよう、住民目線に立って取り組んでいきたい」と語る。

公益財団法人
共生地域創造財団
大槌事務所

住所 〒028-1115
岩手県大槌町上町2-12
TEL/FAX 0193-27-8923
ホームページ
<http://from-east.org/>

77回目

市民リレー

東北の元気

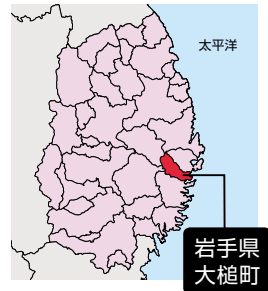
今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

これからの暮らしを一緒に考える 伴走型の支援

◎公益財団法人共生地域創造財団 大槌事務所（岩手県大槌町）

ライター：元持幸子

岩手県
大槌町人目を気にせず利用できる
仮設住宅の一部屋を使った相談室

5人の大槌事務所メンバー



定期的に2人1組で町内仮設住宅を個別に訪問

東日本大震災から8年目となる岩手県大槌町では、災害公営住宅完成や自立再建に伴い、2146戸あった仮設住宅からの移転が進んできた。しかし同町では、住宅にかかわる復興事業の遅れなどを理由として、2020年3月まで応急仮設住宅（プレハブ仮設）の供与期間が延長された。19年6月の現在時点で、91世帯が応急仮設住宅に入居している。

17年より同町から被災者再建支援事業の委託を受け、仮設住宅からの転居の支援を行っているのが共生地域創造財団だ。大槌事務所統括の中居知子さん（35歳）は、「私たちは、転居の手続き支援だけではなく、相談者にあわせた今後の暮らしの形を一緒に考える支援をしています」と語った。一回の訪問は一時間程度で、相談者の考えや思いに耳を傾ける。相談者が抱える課題は多岐に渡る——高齢のため手続き方法や書類内容を理解できない。手続きや補助金情報がわからない。体調が悪くなり、この先の暮らしを考える余裕がなくなっている。日々の暮らしを送るこ

とがやっつとだ、など。訪問を繰り返しながら、情報をわかりやすく伝え、課題を共有したり、専門機関や暮らしの制度利用につなげることもある。

同財団は被災者支援を行うなかで、行政や関係機関へのつなぎ役や社会的困窮への対応、食料支援活動など、相談者の現状にあわせた柔軟な対応をしている。課題対応の際は、必要に応じて、家族関係や財産状況などの個人情報を取り扱うことも多い。相談者との信頼関係が構築され、財団が守秘義務を厳守すると認識されると、相談者が冷静に状況を話し、身内には言いにくいことを相談されることもある。

町は、住宅関連の復興事業が完了する20年3月を目的に仮設住宅からの移転を目指している。しかし、現状の暮らしの変化や課題は多岐に渡り、制度や専門機関のみでは解決できないこともある。中居さんらは、「相談者が自分ごととして今後の生活について考え、方向性を決めていけることをたいせつにしながら、伴走型の支援を続けていきます」と想いを話す。

どろろでもサロン

第24回

自然なつながりと支え合いを生み出す



つながりづくりの『協議体』

山形県朝日町

誰もが暮らしやすい地域をつくる——こうしたテーマを話し合う場の一つが、介護保険法に基づく「協議体」。住民、行政、社会福祉協議会など多様な個人・団体が連携して地域づくりのあり方を考える。

法に基づく、となると何やら堅苦しく、かじこまった印象だが、地域づくりで大事なは何といっても「つながりづくり」。協議体も、メンバーがある程度気心の知れた関係をつくれれば、話し合いはもちろん、何らかのアイデアを実践する際も協力しやすい。

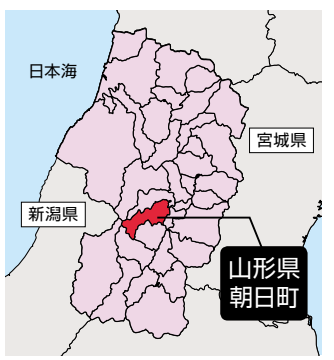
2019年5月27日、山形県朝日町（人口6811人、高齢化率42・1%※2019年4月1日時点）の町役場で、協議体が開かれた。今年度の活動方針などを話し合い、2時間ほどで閉会すると、続いて懇親会が催された。会費2000円です。

清涼飲料などを用意。メンバーらは盛んに酌み交わし、地域づくりへの熱い思いを語り合った。「協議体は、あまり知らない人同士の集まり。何でも気軽に話せる雰囲気ではない。こういう飲み会で親睦を深められ

ば、本音の話もできる。今後は意見交換がより活発になると思う」とメンバーの二人。同町の協議体は「朝日町地域支え合い推進会議」と呼ばれる。メンバーは、長寿クラブ（老人クラブ）、シルバー人材センター、ボランティア団体、サロン活動団体、民生・児童委員協議会の役員、地域住民の代表、特別養護老人ホームや居宅介護支援事業所の職員、町役場と町社会福祉協議会の担当者、それに住民主体の地域づくりを支援する「地域支え合い推進員」（＝生活支援コーディネーター）など計15人。2016年5月に発足し、毎年5回程度会合が開かれる。

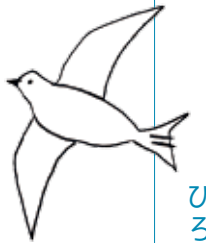
懇親会は今回が初めて。きっかけは、年度替わりで住民団体の役員が交代すると協議体の顔ぶれも変わるため、その前に「慰労の会を」という提案が出たこと。あいにく前年度中は準備が間に合わなかったが、年度が改まり、新メンバーを迎えた最初の会合で、懇親会が実現した。

同町では伝統的な集落行事や祭りがよく保たれ、その実行の前後にはしばしば宴席が設け



られる。これが住民同士の顔の見える関係構築に「役買う」。こうした昔ながらのつながりづくりの知恵が、協議体の運営にも生かされている。木

広島への寄り添える場所でありたい



ひろしま避難者の会「アスチカ」は、東日本大震災で広島県内に避難中の当事者による当事者のための会である。県外避難者の孤立防止と情報共有を目的に2012年10月に設立し、生活再建支援の活動もしている。現在の会員数は101世帯・330人（避難元は宮城・福島・関東7都県）。14年6月には、広島市内に事務所を兼ねた「コミュニティスペースたねまく広場」を開設し、相談窓口や交流会、地元住民による料理教室や針灸、

**35%が今後の生活拠点に
悩む**

手づくり品や野菜の販売などを展開。これまで延べ5千人が利用する地域交流の場となってきた。

会員のうち9世帯30人が宮城県からの避難者で、残りは福島県と関東地方からが半々だ。岩手県からの避難者の会員は昨年ゼロになった。広島県内に住む家族や親族を頼って避難した人や、原発事故の影響で避難した人が多い。広島県はアスチカと連携し、避難者向けの情報を郵送することを継続している。

今年3月にとりまとめた会員世帯対象のアンケート（回収率約52%）では、回答者の35%が今後の生活拠点を「決めていない」と回答。広島県への定住を決めた世帯が約42%ある一方で、子どもの進学問題や避難元に



たねまく広場では、東北被災3県に関する資料閲覧コーナー、広島県内の物産や会員・地域の人の手づくり品の展示・販売を行っている



広場で手づくり品等を出荷する作業中

戻ったときの仕事の悩み、避難元に残る親の健康問題で悩む世帯が増えている。

会員の声に丁寧に寄り添う

会員のなかには、これまでイベントに参加したことではないけれど情報を得たい人や、何かあったときに相談ができる安心感から登録している人もいる。アスチカでは、年1回実施するアンケートから、支援すべき人を見極めていくが、個人情報や壁があることから、

昨年度より会員宅への全戸訪問を開始。生活状況を確認しながら、個人情報を得て生活が落ち着いてきた証拠でもある」「たまに電

認しながら、個人情報や専門機関に提供してよいかという意向を確認して歩いている。あわせて、避難者の暮らす市町村社会福祉協議会に状況を伝え、共有する機会をもっている。

また、西日本に暮らす宮城県からの避難者支援に取り組む「みやぎ避難者帰郷支援センター」事業が18年3月末に終了したあとも、独自に相談専用フリーダイヤルを開設したままにしている。民間の助成金を活用して、避難元に帰省する旅費を補助する仕組みを整えるなど、会員の声に丁寧に寄り添ってきた。

アスチカのスタッフは現在4人。「会員の家を訪問すると、皆さん地に足をつけて8年間がんばって生活してきたのだなと実感する」「広場に姿を見せなくなるのは、友だちや情報を得て生活が落ち着いてきた証拠でもある」「たまに電

話をもらったり、顔を出してくれると、近況を確認できてうれしい」とほほえむ。5年前の豪雨による広島市の土砂災害や昨年の西日本豪雨災害時には、アスチカも被災者支援にあたった。代表の三浦綾さんは、「誰にとっても暮らしやすい社会であれば、避難者の暮らしもスムーズに再建されやすい。会員のためにも、地域との連携を深めたい」と話す。 **小**

DATA

ひろしま避難者の会「アスチカ」

〒733-0003 広島県広島市西区三篠町2丁目15-5
事務局電話 :082-962-8124
Eメール:hiroshima.hinan@gmail.com
URL:hiroshimahinanshanokai-asuchika.com
宮城県避難者専用フリーダイヤル :0120-73-8124

小さな工夫から —コミュニティの自立に向けて—

ふなと・よしかず

SIT Graduate Institute (米国) にて修士号取得。東日本大震災後の4月からNGO職員として、岩手県大船渡市でコミュニティ形成を中心とした復興支援に従事。2013年より岩手大学。災害公営住宅等で住民総参加型のコミュニティ形成や自治会設立等を支援。2016年度からの3年間で26か所、150回の住民集会を開催、延べ参加者は2,872人。「自分ごと」から「自分たちごと」としてかわる、人づくりを各地で実践。

3年目の試み

特製うちわを手にしているのは、岩手県宮城ケ沢アパート(災害公営住宅)自治会の役員の方たちです。うちわは、30人余り集まる役員会で、全員に配られます。入居当初から伴走する支援者が提案し、役員有志と手づくりしました。表面に「いいねー」、裏面には「ちょっと待って」と書かれていて、色分けされています。意見に対してや多数決の時などに、うちわをあげて意思表示します。3年目を迎えた自治会が、新たな試みとして取り入れたものです。

一歩踏み込む

うちわの活用を検討した時、役員からは「大人だから必要ない」など、賛否両論がありました。しかし、活用を決めたのは、より多くの人たちが主体的に会議に参加し、意思を表わす機会をつくりたい、という理由からでした。それまでの役員



会では、発言する人が限られたり、事情を知っている一部の人だけで話が進んだりして、コミュニケーションが取れないことが何度もあったからです。取り組みは始まったばかりですが、手をあげるよりも気軽に、わかりやすく意思表示ができるため、少しずつ効果が表れています。単純に集まるだけでは生まれにくい、一歩踏み込んだコミュニティづくりの環境ができています。

共有・共感・協働

これまで、コミュニティは意図的につくるものとして、さまざまな試みが行われてきました。

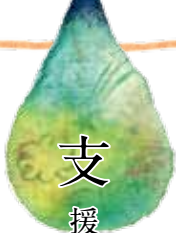
その成熟度は、人のつながりの強さに比例して段階的にあがります。まず、お茶会などの集まる場ができる、参加者が時間を「共有」できるようになります。柄ヶ沢の自治会で言えば、役員会も場のひとつです。そこで顔見知りになると、次第にお互いを理解し「共感」が生まれます。一歩踏み込んで、考えや思いを理解し合う段階です。日常の会話では、うなずきや復唱によって共感を表わしていますが、人数が多くなるとうちわのような道具が役立ちます。そして、共感が広がること「協働」に発展させることができます。目的に向かってともに働くことで、コミュニティに応用力が備わり、つながりが強固になります。畑作業や、お祭りがコミュニティづくりに効果的と言われるのは、このためです。

次の段階へ

震災から10年の節目が見え始めた現在、被災地

のコミュニティづくりは、周辺地域との融合、支援からの自立、という目標を実現するたいせいな時です。コミュニティの状況は千差万別ですが、「共有・共感・協働」という3段階を考えた時、支援者は常に次の段階へ進むための機会を見極めなければなりません。その機会はひとつではなく、たくさんあります。さまざまな協働を生み出すことが、コミュニティを成熟させ、人を豊かにします。そのための小さな工夫に、挑戦し続けたいものです。





支援員インタビュー

3

— 支援員になったきっかけは？

新井 前々職でヘルパーをしていました。その頃からの知り合いだった新井谷さんや前の職場の上司に紹介されて相談員に応募し、11年11月当初から活動しています。

新井谷 彼女のヘルパーとしての仕事ぶりを知っていて信頼していたので、被災者支援員という新たな職域ですが、お願いして今日に至っております。

— 見守り巡回訪問の現状について

新井 17年に、災害公営住宅の入居者を対象にアンケートを実施して、訪問希望の有無と頻度を聞きました。希望する方と必要と思われる方を訪問しています。その結果は毎朝のスタッフミーティングで共有し、必要に応じて市役所や保健師、ケアマネジャーなどにつないでいます。

新井谷 災害公営住宅によっては一般入居者が増えています。一般入居でも高齢独居の方などもあります。被災者ではなくても関係ないとは言えません。一般入居の方にも『被災者支援で回っ

塩竈市社会福祉協議会は、2011年11月より市の委託を受けて、「塩竈市ふれあいサポートセンター」を運営し、ふれあいサポートセンター相談員(以下相談員)や看護師などを配置している。相談員は、災害公営住宅の見守り巡回訪問を行い、各種相談に乗って関係機関とのつなぎ役を担う。あわせて、「ふれあいサロン」の企画運営を通じて住民間の関係を育む。同センター所長の新井谷美代子(にいやみよこ)さん同席のもと、相談員の新井玲子(にいりんこ)さんに話を聞いた。(聞き手:田中義則)

塩竈市ふれあいサポートセンター ふれあいサポートセンター相談員

新井玲子さん



ているんですけど、時々顔を見に来てもいいですか」と声をかけて、希望があれば訪問するようにしています。

— ふれあいサロンの内容について

新井 市内の災害公営住宅7か所で開催しています。離島の3地区は月1回、それ以外は月2回の開催です。活動は手芸や脳トレ、トランプ、映画の上映など、地区ごとにさまざまです。参加者が講師を務めることもあります。私も手芸を教えることもあります。内容にならないよう工夫しています。『今度何つくるの?』『待っていたよ』と参加者は楽しみにしてくださっているようです。

— サロンと見守りの連動は?

新井 サロンの参加者が急に来なくなれば、見守りに行くこともあります。原因は体調を崩されている場合もありますが、人間関係の場合もあります。そういう時はあまり無理に誘わず、『今度〇〇をつくるからよかったら来てください』とさりりと誘

うようにしています。

— 心がけていることは?

新井 住民と笑顔で接することと寄り添ってよく話を聞くことですね。最初は挨拶程度の関係でも、日が経つにつれて、家族や津波被害のことなどいろいろな話をするようになりました。

— 今後の抱負や目標は?

新井谷 新井 私たちがいまやっている事業をどのように上げるかが、これからの課題です。いまは住民の困りごとが直接私たちに届いていますが、「この相談はこの機関につながればいい」と示していかなければいけません。サロン活動も地域のみんなでやれるように、サポートしていきたいです。



伊保石住宅集会所でのふれあいサロンで、はさみと手だけで行ったフェルトバッグづくり

「継続を連携の力に (みこしれん)」

「みこしれん」は「みやぎ広域支援団体連携担当者会議」の略です。東日本大震災の県域中間支援団体・機関の担当者が集まる月に一度の会議で、当支援事務所も参加しています。その目的は、各団体がお互いの専門性や活動領域を理解し、同じ目標を共有し連携して各地の被災者の生活再建支援を促進することです。

県域で活動する私たちの連携は、最初はなかなかうまくいきませんでした。「連携しましょう」と口で言うのは簡単ですが、組織連携は想像以上に難しいものでした。県域中間支援団体と言っても、公的機関、社会福祉協議会、NPOなど、組織形態や意思決定の仕方も動き方もまったく違うのだから当然です。あの頃は夜な夜なお酒を飲みながら「連携がうまくいかない」と愚痴を言っていたように思います。でも、うまくいかないとただ憂いていても仕方がないと思っていたのも確かです。そこで、まずは実務担当者が集まって、現状を把握し合い、それぞれの役割を確認し合える場をつくろう、ということになったのです。

これまで、それぞれの活動報告をはじめ、自分たちが目指す地域の姿を共有するワークショップ、市町ごとの課題を検討するケース会議、すべての活動の根底にある「人権」を学ぶ勉強会など、担当者ならではの会議を続けてきました。継続することで生まれたのは、お互いへの信頼、過去の教訓の学び合い、この先やってくる課題に備える力、新しい事業のアイデアなど多様です。いまでは、活動内容は違って目指す目標は一緒という安心感があり、多少の意見の食い違いにもうろたえることはありません。

この8月で53回目を迎えた「みこしれん」では現在、もし東日本大震災と同レベルの災害がおきたら私たち県域中間支援のネットワークはどう動くか、対応シミュレーションづくりに取り組んでいます。今後、図上演習や県との連携強化などに生かしていきたいと考えています。

「みこしれん」はオープンな場です。参加してみませんか？（真壁さおり）

宮城県内の研修のお知らせ

令和元年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<地域支え合いの発見の仕方～かくれた資源を見つけ出せ～>
【石巻会場】 8月30日(金) 河北総合センター ビッグバン

<地域支え合いの伝え方～見つけた資源を伝えよう～>
【仙台会場】 9月13日(金) 仙都会館
【石巻会場】 9月30日(月) 石巻商工会議所

令和元年度 宮城県地域福祉コーディネーター研修事業

<地域支え合いの共有の仕方～見つけた資源を知らせよう！お宝発表会の持ち方～>
【気仙沼会場】 8月21日(水) 気仙沼市ワン・テン庁舎

<地域福祉コーディネーター基礎・実践研修>
【仙台会場】 9月17日(火)～18日(水) 宮城県管工事会館
【石巻会場】 10月3日(木)～4日(金) 河北総合センター ビッグバン

<地域支え合い活動実践研修 福島県福島市編>
【仙台会場】 10月8日(火) 仙都会館

▼研修の詳細は下記URLをご参照下さい。

http://www.clc-japan.com/miyagi_c/2019_youko.pdf

令和元年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修事業

<生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)研修>
【仙台会場】 9月27日(金) エスポールみやぎ

<生活支援コーディネーター基礎・実践研修>
【気仙沼会場】 9月5日(木)～6日(金)
気仙沼市本吉保健福祉センター「いこい」
【仙台会場】 10月17日(木)～18日(金) 仙都会館

<初級研修>
【柴田会場】 10月2日(水) 柴田町地域福祉センター

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

E-mail joho@clc-japan.com

☆次号予告 特集「災害公営住宅の見守り」